



國史肇要

孝明

卷十五

甲
第
十
六
卷

リ 5
16
15



門伊5
號15
卷15

國史攬要卷之十五

笠間

棚谷元善

編輯

安政四年正月、和蘭ノ甲比丹、長崎ニ在留スル者、書ヲ奉
行ニ呈メ、曰、貴國已ニ和親ヲ魯米英ノ三國ニ結ス、貿易
ヲ開クモ亦近キニアラズ、佛蘭西之ヲ聞カハ、亦マサニ
來ル可シ、此四國ハ、宇内ノ強國ニシテ、貴國之ト交ル舊法
ヲ變セス、ンハアル可ラス、抑々日本ノ富強ハ、東方ニ冠
タリ、地靈ニシテ人傑ナル、尤ヨリ支那ノ及フ所ニ非ス、然
レ厄泰西ノ人常ニ言フ、東方ノ諸國ハ、已レヲ尊ヒ他ヲ
賤ニスルノ癖アリト、今之ヲ以テ強國ニ交ル所ハ、或ハ

國史攬要

卷之十五

○孝明

甲
卷之十五

小事ヨリ大釁ヲ開カン、支那廣東ノ變是其前鑒ナリト、
 老中堀田正篤等謂ラク、彼カ説ク所、其好ム所ニアルノ
 ミニ非ス、頗ル所見アリ、我レ既ニ和親ヲ結ス支那ノ覆
 轍蹈ム可ラス、寛永以前ノ舊典復ス可シ、○七月、水戸中
 納言事務ニ參スルヲ辭ス、其議論合セサルヲ以テナ
 リ、○米國ノ公使、巴爾理斯、猶下田ニ在テ、屢々請フ江戸
 ニ入テ將軍ニ謁セント、諸吏其舊典ニ非ルヲ以テ、反覆
 曉諭ス、巴爾理斯悍然トシ聽カス、諸老相議シ、已ムコト
 得スノ終ニ之ヲ許ス、水戸中納言、上書ノ極メテ其不可
 ナルヲ論ス、溜詰ノ列侯モ亦連署ノ之ヲ諫メ、尋テ肥

前守鍋島齊正モ上書メ之ヲ諫ム幕議既ニ決スルヲ以
 テ納レス、○十月、巴爾理斯遂ニ江戸ニ入り、蕃書調所ニ
 舎ス、尋テ執政堀田正篤ノ邸ニ往テ兩國ノ交際事務ヲ
 論定ス、前田島津伊達細川以下ノ、二十一藩、連署メ其登
 營ヲ諫メ且曰使節城ニ入ルノ日、我カ輩登營スルヲ能
 ハス、請フ之ヲ怒セヨト、水戸ノ士、信田仁十郎、堀江克之
 助、蓮田藤藏、諸執政カ米使ノ為ニ迫脇セラレ、遂ニ其登
 營ヲ許ス、一ヲ慨シテ、巴爾理斯ヲ刺ント欲シ、十六日ノ
 夜、潜カニ其舎ニ入ル事就ラスメ捕ヘラル、○廿一日、巴
 爾理斯大城ニ朝メ國書ヲ獻ス、將軍家定、之ヲ大廣間ニ

接見シ、禮畢テ服ヲ賜ヒ、且ツ之ヲ饗ス、後又老中ニ面メ、貿易開港ノ事公使ノ居處條約印信ノ件々ヲ對議ス、○十二月幕府大學頭林健監察津田半三郎ヲノ京師ニ入ラシメ、米國ノ書及ヒ巴爾理斯カ、陳スル所ノ諸件ヲ上リ、時勢切迫已ムトヲ得ス、通商開港ヲ許サント欲スルノ情實ヲ奏メ、更ニ勅許ヲ請フ、傳奏官之ヲ奏シ、乃チ二人ニ謂テ曰應サニ明春ヲ竣テ之ヲ議スヘシ、二人書ヲ以テ之ヲ江戸ニ報ス、○五年正月堀田備中守及ヒ川路左衛門尉、岩瀬肥後守、幕命ヲ以テ西上シ、二月五日京師ニ入り、再ヒ奏メ之ヲ請フ、正篤密カニ關白尚忠大問政

通傳奏官大納言聰長、大納言光成ニ、金各々五百兩ヲ贈ル、諸卿皆却ケテ受ケス、先是天皇大臣以下參議以上三十名ヲ召メ之ヲ議スル者再三、公卿各々意見ヲ疏メ之ヲ奏ス、皆幕議ヲ悦ハス、是ニ至テ又之ヲ沮ム、正篤等大ニ困ス、○二月巴爾理斯已ニ將軍ニ謁スルヲ以テ、益々逼テ條約ヲ請フ、幕府書ヲ飛メ、正篤等ヲ督促ス、正篤等甚々對奏ニ究窮シ、數々會議ス、都築駿河守峯重、策ヲ運ラメ、彦根ノ臣長野主膳ヲ薦ム、主膳關白家ノ臣、島田左兵衛尉ト善キヲ以テ、島田ニ依テ關白ニ説カシム、關白尚忠、其事情ヲ察シ、遂ニ報案ヲ草ス、文中ニ外國ノ處置

八幕府ニ依頼スルノ語アリ、藤原忠能、藤原正房執テ不
可ト為メ曰、是幕府ノ意ニ媚ルナリ、朝廷ノ威何ヲ以テ
立タント、顧テ諸卿ニ問フ、諸卿ミナ同聲之ニ應ス、議論
復々沸騰シ、三條内府實愛以下八十餘人關白ノ邸ニ詣
テ之ヲ争フ、於是朝議終ニ決シ、正篤ヲ召メ勅報ヲ傳テ
曰、條約ノ事神州安危ノ係ル所、更ニ三家及ヒ大小ノ侯
伯ト熟議シ、其公論ヲ以テ之ヲ奏セ玉、正篤乃チ勅ヲ奉
ス時ニ三月廿日ナリ、其十八日都築峯重自殺ス、奏請ノ
事成ラサルヲ以テ死ヲ以テ正篤ニ謝スルナリ、幕府乃
チ正篤ヲ召シ還ス、四月、正篤等遂ニ要領ヲ得ス、東ニ

歸ル、是月幕府井伊掃部頭直弼ヲ以テ大老ト為ス、○五
月幕府答書ヲ巴爾理斯ニ與ヘテ曰、朝廷ノ議、列族ノ論、
未々確定セス、請フ七月廿七日ヲ以テ期ト為メ、條約ヲ
定シ、巴爾理斯曰、日本政府何ソ因循ナルト、遂ニ下田ニ
還ル、○六月、暴瀉ノ疾大ニ行ハレ、天下死スル者數萬人、
江戸尤モ甚シク、死スル者殆コト十萬人、○是月、米利堅
及ヒ魯西亞ノ船、各一艘横濱ニ來泊ス、幕府永井玄蕃頭
尚志勅定井上信濃守清直奉行堀織部正利箱館岩瀬
肥後守某目付等ヲ遣テ之ヲ檢ス、諸吏其來意ヲ巴爾理斯
ニ問ス、答テ曰、英佛ノ軍艦不日ニ至ラン、二船先ツ之

ヲ報スルナリ因テ謂テ曰、二國新タニ清國ニ勝テ、清國英佛
ト戦テ勢焰ヲ以テ来リ迫ル其志測ル可ラス、吾レ恐ク
敗績スハ貴國其誅求ニ堪ヘサラシマ、今速カニ條約印信ノ
許スルハ、吾レニ國ニ喻スニ、同盟ノ國ナルヲ以テシ、間
ニ居テ無事ヲ圖ラント、諸吏頗ル惶惑シ、之ヲ幕府ニ聞
ス、大老井伊直弼以為ラク、諸國垂涎ノ至ル此ノ如シ、徒
ラニ款許ヲ待テ清國ノ轍ヲ踏ニヨリハ速カニ彼ニ許
ヌ國家ノ無事ヲ圖ルニ若カスト、終ニ神奈川ニ於テ條
約ヲ結ビ印信ヲ給シ、而メ後ニ之ヲ京師ニ奏ス、尋テ魯
英佛三國ト條約ヲ結ビ、貿易ヲ開久、一ニ米國ニ同シ皆

2

朝命ノ待タスノ之ヲ專決ス、於是諸藩ノ烈士、草莽ノ激
徒、大ニ憤慨シ、尊攘ノ説益々起ル、○初メ將軍家定子無
シ、尾張大納言勝慶、越前宰相慶永、津山中將、仙臺少將、土
佐侍從、佐倉侍從、等皆謂ラク一橋刑部卿慶喜、長ノ且賢聲
アリ、宜ク軍職ヲ嗣クヘシト、中外亦タ望ヲ属ス、井伊大
老聽カス、群議ヲ排メ紀伊宰相家茂ヲ立ントス、年甫テ
十二、尾越ノ兩主、水戸中納言等以為ラク、國家多事ノ時
ニ當テ、長君ニ非レハ不可ナリ、宜ク先ツ慶喜ヲ立テ次
テ家茂ニ及ホス可シト、乃チ相謀テ登營レ、將軍ヲ見テ
之ヲ議セント欲ス、將軍疾アリ、大老拒テ納レス、遂ニ三

主ト争辨ス、問部詮勝、其耳目ノ異常ナルヲ見テ、公事ニ
托、大老ヲ召ス、大老内ニ入テ、復タ三主ヲ見ス、三主憤
々トノ退久直弼是ヨリ三家ヲ忌ム○七月四日大將軍
家定薨ス、温恭ト謚ス、宰相家茂入テ職ヲ繼久將軍既ニ
薨ノ未タ夜ヲ發セス、命アリ尾張水戸越前ノ三家及ヒ
一橋刑部卿ノ登營ヲ禁ス、其他譴ヲ蒙ル者十餘人、物議
囂然タリ、先是朝廷救ヲ下シ、三家及ヒ大老ヲ召メ、國事
ヲ廷議セシト欲ス、是ニ至テ大老直弼奏對メ曰、尾水越
ノ三家ハ譴ヲ蒙リ、大老ハ外國ノ事務繁劇ナルヲ以テ、
西上スルヲ能ハス、○八月、朝廷内救ヲ水戸中納言ニ下

ノ曰、幕府恣ニ條約ヲ許ス、後ニ之ヲ奏シ、宰臣ヲ召メ國
事ヲ議ス、辭ノ至ラス、朝命ヲ奉戴スルノ義安クシカ在
ル且方今多事ノ日ニ當テ、親藩ヲ疏斥ス、人心何ヲ以テ
勤カサラシ、宸襟何ヲ以テ安ンセシ、汝更ニ三家三卿老
中及ヒ列藩ト群議ヲ竭シ、國事ヲ更張シ、聖慮ヲ安ニス
可シ、其臣鶴飼幸吉、鹿見島ノ臣、日向部伊三次、之ヲ傳奏
官ニ受ケ、齎ラシ、江戸ニ來ル、先是大老直弼、潜カニ其臣
長野主膳ヲ京師ニ遣テ、事情ヲ偵探セシム、是ニ至テ水
戸ノ臣、安島帶刀、鶴飼父子等カ、刑部卿ヲ納レシトテ周
旋シ、或ハ内旨ノ下ル所以ヲ偵ヒ知リ、或ハ搢紳ノ家士、

諸藩ノ臣及ヒ文人儒士ノ朝論ヲ賛成シ幕政ヲ誹議ス
ル者ノ情實ヲ搜索シ盡ク之ヲ大老ニ告久○九月井伊
中將老中間部下總守詮勝ヲ京師ニ遣リ所司代酒井若
狹守忠義ト謀リ先ツ鷹司近衛三條ノ三卿ヲ幽シ高橋
兵部大輔小林民部太輔兼田伊織三國大學鷹司森寺因
幡守富田織部卅羽豊前守三條飯田左馬有栖川若松奎頭
入江雅樂頭一條春日讚岐守久我宮女村岡及ヒ鶴飼吉
左衛門安島帶刀茅根伊豫助水戸梅田源次郎頼三樹三
郎等三十五人ヲ捕ヘテ江戸ニ檻送シ又橋本左内越前
飯泉喜内日向部伊三次藤森恭助鶴飼幸吉以下廿七人

ヲ江戸ニ捕フ○十二月源家茂ヲ以テ征夷大將軍ト為
ス○六年八月幕府水戸前中納言齊昭ヲ禁錮ス先是中
納言外國ヲ處置スルノ意見ヲ書メ之ヲ幕府ニ呈ス老
臣等採用セズ中納言憂憤ニ堪ヘズ其説ヲ朝廷ニ奏ス
於是大老等其外事ヲ京師ニ内奏シ幕嗣ヲ堂上ニ謀リ
徹者ヲノ論旨ヲ奉セシムルノ事ヲ責メ公武ヲ離間シ
輔弼ノ任ヲ失フト為メ之ヲ水戸ニ禁錮ス尾張大納言
越前宰相土佐前少將伊達遠江守等又別邸ニ屏居セシ
メ一橋刑部卿ヲ以テ軍職ヲ望ムト為シテ之ヲ幽シ終
ニ安島鶴飼父子橋本茅野根頼等ヲ斬ニ處シ小林民部

太輔以下又或ハ禁錮シ或ハ流ニ處ス、又岩瀬肥後守、永井玄蕃頭、川路左衛門、淺野備前守、鶴殿民部少輔等カ職ヲ罷ム、吉田寅次郎モ亦間部詮勝ヲ狙撃セントスルノ罪ニ坐ノ刑セラル、時人皆其濫刑ヲ謗リ、少納言信西ノ流トナシ、或ハ漢ノ黨錮、明ノ東林ノ禍ニ比ス、是ヨリ井伊大老ノ威焰、烈火ノ如ク、上下屏息ス、初メ大老ノ刑ヲ議スルヤ、大田道醇備後守時ニ再任ス諫テ曰、此輩ノ為ス所、亦憂國ノ餘リニ出ツ、宜ク寬典ニ從フヘシ、板倉周防守、佐々木豊前守モ亦諫テ曰、若シ之ヲ極刑ニ處スルキハ、衆怨ノ萃ル所、或ハ禍亂ヲ生セシ、大老從ハス、終ニ獨斷

ヲ以テ之ヲ行フト云、○梅田源次郎先是獄中ニ死ス、源次郎若狹ノ人、雲濱ト號シ、學術闇齊ヲ師トス、魯船ノ大坂ニ至ルヤト津川ノ人、兵ヲ起メ之ヲ撃ントシ、雲濱ノ推ノ帥ト為ス、時ニ其妻疾篤シ、雲濱顧スメ出ツ詩ヲ賦メ曰、妻臥病牀、兒泣飢、挺身直欲拂我衣、今朝死別與生別、唯有皇天后土知、歸レハ則妻既ニ歿ス、茅野根伊與之助才學文章ヲ以テ著ハル、其囚ニ就クニ及テ詩ニ篇ヲ賦メ兒ニ示ス、悲壯讀ハニ堪ヘス、橋本左内、博覽比無シ、獄中ニ在テ資治通鑑ヲ註ス、又詩ヲ作テ曰、苦冤難洗恨難禁、俯則痛悲仰則吟、昨夜城中霜始隕、誰知松柏後凋心、頼

三樹三郎、學術氣慨、山陽ノ子タルニ愧テス、獄中ノ詩ニ
曰、排雲手欲掃炊爨、失脚墮來江戶城、井底痴蛙過憂慮、天
邊大月缺光明、身臨禹鑊家無信、夢斬鯨鯢劍有聲、風雨他
年苔石表、誰題日本古狂生、三樹ノ罪死ニ抵ラス、其評定
所ニ在テ、罵詈止マサルヲ以テ、遂ニ斬ラル、吉田松陰、藩
ニ在リ、曾テ梅田ト密議ヲ合スルノ嫌ヲ受テ、江戶ニ檻
送セラレ、然レモ松陰梅田ト議論元ヨリ合セス、其事遂
ニ解久松陰自ラ間部閣老ヲ圖リ且ツ朝伸大原重徳ヲ
其藩ニ迎テ尊懷ヲ主張セントスルノ事ヲ陳述ス、幕吏
之ヲ聞テ始テ驚キ、遂ニ之ヲ斬ル、日向部伊三次幽囚中

ニ病テ歿ス、其始テ評定所ニ入ルヤ、幕吏之ヲ詰訊ス、伊
三次、沈慨激昂、天下ノ利害ヲ論辯シ、一坐悚然タリ、其書
懷ノ詩ニ曰、星斗闌干月滿天、書窓深坐不成眠、欲知世運
隆興兆、神武東征戊午年、其詔書ヲ奉メ東下ス、正ニ戊午
ノ年ナリ、藤森恭助、弘庵ト號シ、後チ天山ト号ス、學術醇
粹篤行ニシテ、經世ノ才アリ、幕吏其水戸中納言ノ知遇ヲ
受ルヲ以テ、必ス之ヲ死地ニ置ント欲ス、然レモ其罪無キ
ヲ以テ、遂ニ放逐セラレ、後チ釋サレテ江戶ニ歸リ、疾ヲ
以テ歿ス、自ラ肖像ニ題ノ曰、後天下之樂而樂、吾聞其語
矣、未見其人也、先天下之憂而憂、吾聞其語矣、世豈無其人

哉賛曰、布衣憂國似陳亮、清議買禍似范滂、衆笑其狂、獨曰、今之時何時、吾怪人之不狂、嗚呼、是真可謂狂者、書數種及ヒ詩文集アリ、○是年七月ヨリ九月ニ至テ、暴瀉亦行ハル、死者去年ニ比スレハ、半ヲ減ス、○十月大城災アリ、○是年夏、横濱長崎箱館ノ三港ヲ開キ、人民ノ貿易ヲ許シ、五國條約ヲ天下ニ頒ツ、○萬延元年正月、幕府始テ使船ヲ米利堅ニ遣ル、村垣淡路守、新見豊前守、外國本行木村攝津守、單艦奉行小栗豊後守、目付以下同載ル者二百餘人、十月ニ至テ歸ル、○三月三日、水戸ノ臣、大關和七郎、齋藤監物等十八人、大老井伊掃部頭ヲ外櫻田ニ投ス、此日天大ニ

雪ノル、黎明諸士愛宕山ニ會メ、束裝訣飲シ、伍々隊ヲ結ヒ、櫻田門ニ至テ、大老ノ登營ヲ待ツ、辰牌興至ル、諸士踊躍メ、直チニ前驅ヲ擊ツ、前驅驚キ亂ル、輿側ノ士亦駭テ之ニ赴ク、數人亦左右ヨリ起テ、進テ其輿ヲ刺ス、從士捍鬪シ、白刃飛雪ト相亂ル、諸士縱橫亂斫、遂ニ大老ヲ斃シ、其首ヲ提テ去ル、井伊氏ノ臣、加田九郎太、名越源次等、死スル者六人、傷者二十人、諸士亦創ヲ蒙リ、山口辰之助、鯉淵要人、八代洲河岸ニ自殺シ、廣岡子之次郎、薩藩ノ士有村治左衛門、卜辰口ニ自殺ス、齋藤監物、黒澤忠三郎、佐野竹之助、蓮田市五郎、脇坂氏ニ至テ自首シ、大關和七郎、森

五六郎杉山彌七郎、森山繁之助等細川氏ノ邸ニ至テ自首シ、一封ノ書ヲ脇坂氏ニ呈シ、曰、井伊中將、幼君ヲ擁立メ、威福ヲ恣ニシ、列侯麾下正義ノ人ヲ擯斥シ、更ニ親藩ヲ禁錮シ、將軍ノ羽翼ヲ殺キ、救許ヲ待タズ、檀マ、ニ條約ヲ許シ、三公ヲ幽屏シ、其臣ヲ流放シ、重賂ヲ用テ關白殿下ヲ欺罔シ、諸大夫以下有志ノ士ヲ斬戮禁錮スル、天下其寃ヲ知ラサルナシ、青蓮院宮ノ英明ヲ忌テ之ヲ幽シ、遂ニ至尊ノ讓位ヲ議スルニ至ル、臣等此奸賊ト天下ニ並ヒ立ツト能ハス、今天ニ代テ之ヲ誅ス、神明其レ照覽セヨト、乃チ速ニ死ニ就ニテ請フ、佐野齋藤ノ二

士、創重メ遂ニ細川ノ邸中ニ歿ス、○此月廿三日、高橋多一郎父子、京師天王寺ニ自殺シ、藤原源太郎生玉祠前ニ自殺ス、皆水戸ノ士櫻田義舉ノ同志ナリ、○八月水戸前中納言源齊昭卒ス、齊昭英明ニメ學ヲ好シ、文武ノ大略アリ、其建白施設スル所、皆人意ノ表ニ出テ、幕府用ヒス識者之ヲ惜ム、己未九月江戸ヲ發スル詩ニ曰、白髮蒼顏萬死餘、平生豪氣未全除、寶刀難染洋夷血、却想南陽舊草廬、水戸ニ在テ梅花ニ歌ヲ添テ呈スル者アリ、其返シニ曰、冬籠リヨシヤ春ベニ咲ストモ知ル人ヲ知レ度ノ梅カ枝天下争テ之ヲ誦ス、後チ朝廷其勤王ノ忠志ヲ賞

ノ從ニ位大納言ヲ贈ル○是月浪士三十七人夜ル薩州
疾ノ郎ニ至リ書ヲ出メ曰水戸公既ニ死シ天下貴藩ノ
外依頼ス可キ者ナシ願クハ貴藩ニ屬メ征攘ノ先鋒ヲ
ラント其姓名ヲ問フニ皆言ハス薩藩即チ之ヲ幕府ニ
啓ス幕府命メ之ヲ其郎ニ置シト○是月人アリ米利堅
ノ書記官比由斯堅ス三田ニ要殺ス幕府大ニ其人ヲ索
ムレ正獲ス○十一月五日堀織部正利熙箱館奉行閣老安藤
對馬守信睦ト外國ノ事ヲ議シ極言面折ス閣老對ル
能ハス利熙家ニ歸テ書ヲ作り再ヒ安藤ヲ規諫メ曰嚮
キニ高論ニ抗言ス罪萬死ニ抵ル然正私心猶怪ム可キ

者アリ一タヒ言ハサル可ラス人ノ將ニ死セルトスル
其言ヤ善シ足下其レ之ヲ容レヨ米國ノ公使米理孛留
屢々貴邸ニ至リ足下之ト國事ヲ議シ私カニ其請ヲ許
スハ何ソヤ足下彼ト眠食ヲ同フシ贈ルニ慶長ノ古金
一萬兩ヲ以テスルハ何ソヤ彼レ醉テ足下ノ侍妾ニ戲
ル置テ問ハサルハ何ソヤ恣ニ御殿山ヲ貸メ居館ヲ築
クヲ許スハ何ソヤ彼レ廢帝ノ事ヲ論シ足下密カニ
國學者ニ命メ其舊典ヲ考索セシムト果ノ然ラハ是天
下ノ逆賊ナリ僕之ヲ聞テ泣血ニ堪ヘス前鑑遠カラズ
彦根ノ元老ニ在リ伏メ請フ足下誠ヲ天朝ニ竭シ身ヲ

幕府ニ致シ、神州ノ大義ヲ忘ル、一勿レ、僕今死ヲ以テ
諫ム、足下其レ之ヲ容レヨ、遂ニ屠服ノ死ス、閣老書ヲ觀
テ悚然タリ、然レ從フ一能ハス、○文久元年二月、水戸家
臣ノ子弟二百人、藩ヲ脱シ、長岡驛ニ屯シ、尊攘ヲ唱ヘ、故
ノ中納言ノ遺志ヲ繼クト稱シ、檄ヲ四方ニ移シ、豪農富
商ニ募テ金穀ヲ出サシム、草莽ノ徒、諸藩ノ亡臣、爭テ之
ニ應シ、千八百人ニ至ル、勢ヒ上野上総ニ連及シ、將サニ
横濱ヲ襲撃シ、互市ヲ許スノ官吏ヲ誅シ、百姓ノ困苦ヲ
救ハントス、幕府戒嚴シ、水戸家及ヒ近傍ノ諸藩ニ命メ、
之ヲ鎮定セシメ、小普請ノ士三百餘人ヲ遣テ、横濱ヲ守

衛シ、諸侯ニ命メ、善福寺^麻、東禪寺^高、濟海寺^三ヲ護セシ
ム、皆洋人ノ館スル所ナリ、○五月、水戸ノ亡臣、有賀重信、
岡見富次郎等十四人、英人ノ所寓、高輪ノ東禪寺ニ入り、
英人二人ヲ殺ス、警衛ノ士、幕府及ヒ郡山ノ兵拒戦シ、重
信等數人亦死シ、衛兵モ亦死傷アリ、英國ノ公使怒テ曰、
政府權ナシ、暴動ノ徒ヲ制スル一能ハス、吾レヨリ之ヲ
制セン、横濱ニ退キ、兵ヲ以テ逼ラントス、幕府外國奉行
ニ命メ、百方之ヲ謝シ、事僅カニ止ム、○十一月、皇妹内親
王和宮東下ス、先是幕府勝光院橋本氏ヲ使トシ、京ニ入
リ、將軍ノ内親王ニ尚セン、一ヲ奏請ス、朝廷未タ許サス、

之ヲ請フ一再三、帝遂ニ吉子内親王、東降ノ例ニ從テ之
ヲ許シ、是ニ至テ東下ス、儀仗善美ヲ盡ス、幕府財ヲ費ス
一鉅萬、蓋シ閣老等相議シ、公武ヲ親睦シ、激徒ノ朝論ヲ
動スヲ防クナリ、○二年正月十五日、處士三島三平、豊原
國之助、細谷忠齊、吉野敬助、内田萬之助、淺野儀助、相見文
之助等、閣老安藤信睦ヲ坂下門ニ擊ツ、從者拒キ戰ヒ、閣
老創ヲ蒙テ、僅カニ免レ、三平等格闘ノ皆死ス、各書ヲ懷
ニシ、閣老罪状ス、大略堀利熙カ陳スル所ト意ヲ同フシ、
天子ノ廢立ヲ謀ルニ至テハ、其罪井伊氏ニ過クトナス、
幕府尋テ安藤侍從ノ職ヲ罷ム、○三月五日、先是太膳太

夫毛利齊親、書ヲ幕府ニ呈メ、天下ノ利害形勢ヲ詳論ス、
幕府採用セス、此日齊親營中ニメ閣老ニ謂テ曰、井伊氏
政ヲ恣ニメヨリ、幕府朝廷ニ背キ人心ヲ失フ、大藩ノ主
皆國ニ就テ、自ラ富强ヲ謀ル、亦幕府ノ輔ク可ラサルヲ
知レハナリ、故ニ僕意見ヲ陳メ、紀綱ヲ張ラント欲ス、公
等カ知ル所ナリ、夫レ方今徳川氏ノ危キ累卵ノ如シ、英
斷ヲ以テ大政ヲ變革スルニ非スンス、天朝ノ怒リ解ク
可ラス、天下ノ人心復タ收ム可ラス、萬一天子ヲ狹テ、四
海ニ號令スル者アラハ、何ヲ以テ之ニ應セン、諸閣老愕
然タリ、久世侍從曰、英斷トハ如何ン、毛利侯睨視ノ答ヘ

ス、頃クノ日松平越前守ヲ舉テ大老ニ任シ、一橋公ヲ以テ將軍ノ輔翼トナシ、川路佐々木ノ類、正義ヲ以テ廢黜セラル、者、悉ク之ヲ擯用スヘシ、諸閣老曰、謹テ教ヲ奉セン、毛利侯因テ曰、若シ京師ノ情實ヲ詳カニセント欲セハ、僕カ臣永井雅樂アリ、宜ク之ニ問フヘシト、即チ退久、閣老等乃チ永井ヲ召メ之ヲ問ヒ、京師ノ情狀ヲ聽テ大ニ驚キ、因テ永井、密カニ事ヲ謀ル、○三月、永井雅樂、閣老ノ命ヲ奉メ、京師ニ入り、書ヲ議奏官中山大納言忠能ニ呈ス、永井頗ル學術有テ、世務ニ練達ス、其條陳スル所、詳密ニノ時勢ヲ洞見ス、然レモ當時脫藩ノ士、搢紳ノ門

ニ出入メ、退讓ノ論ヲ主張シ、永井ノ説行ハレサルノミナラス、大ニ衆怒ヲ受ケ、遂ニ其歸ルヲ待テ之ヲ要殺セントス、永井之ヲ察シ、路ヲ中仙道ニ取テ東ニ歸ル、其藩士米原良藏、亦永井ノ副ト為テ京ニ至ル、歸ルニ及テ屠腹メ死ス、書ヲ遺メ曰、尊攘ノ議貫徹セス、自ラ以テ忠ト為シ、義ト為ス者反テ不忠不義ニ陥ル、故ニ死ヲ以テ謝スト、明年永井モ亦事ヲ以テ自裁ス、○四月、島津和泉久光、江戸ニ赴ントシテ、播州姫路ニ至ル、時ニ諸藩ノ脱士及ヒ浮浪、慷慨憂國ノ輩、泉州ヲ姫路ニ要ス、其巨魁ハ則チ、平野次郎田中河内介安積五郎、荒卷半三郎、有馬新七、

森山新五左衛門、轟武兵衛等、三十餘人、及ヒ其徒二百餘人、書ヲ出メ、曰、幕吏ノ國體ヲ謬リ、朝命ヲ輕ニスル、其罪何ノ舉テ言フヘケン、臣等痛憤ニ堪ヘス、有志ヲ會メ、義舉ヲ謀ル、顧フニ烏合ノ衆、誰令統一スル所ナシ、因テ主公ヲ奉ノ元帥トナシ、速カニ大坂ニ條ノ城ヲ奪ヒ、彦根ヲ焚キ、樞紳ノ幽閉ヲ解テ、令ヲ七道ニ下シ、皇駕ヲ函嶺ニ奉メ、以テ幕府ノ罪ヲ問ヒ、遂ニ外寇ヲ攘ハント欲ス、願ハクハ速カニ之ヲ朝廷ニ奏センコトヲ上、泉州、其志ヲ嘉スト、雖ヒ其暴動ヲ畏レ、先ツ之ヲ撫安シ、率テ伏見ニ至リ、其徒ヲ留メテ、自ラ京師ニ入り、近衛殿下ニ詣テ、其書

ヲ呈ス、朝廷其過激ヲ慮ハカリ、泉州ヲ京師ニ留メテ之ヲ鎮撫セシム、己ニメ薩ノ脱士、大坂ニ在ル者、泉州ノ鎮靜ニ過ルヲ怒リ、京師ニ來リ逼ントス、泉州乃チ藩士ヲ遣テ、之ヲ伏見ニ要ス、遂ニ激論鬪爭、有馬新七以下死スル者八人、藩士亦創ヲ蒙ル、尋テ泉州亦建議スル所アリ、天皇其忠誠ヲ嘉ミシ、元弘勤王ノ首倡、兒島三郎高德ニ等シキヲ以テ、詔メ名ヲ三郎ト賜フ、○四月、幕府朝命ヲ奉メ、青蓮院宮及ヒ鷹司近衛三條等諸公ノ幽屏ヲ解キ、又尾張前大納言、一橋刑部卿、越前宰相、土佐侍從、伊達少將、及ヒ諸臣ノ屏居ヲ釋ス、毛利大膳太夫齊親、召ニ應メ

江戸ヨリ京ニ入ル詔メ島津氏ト同久脱藩浮浪ノ士ヲ
鎮撫セシム○六月廿二日東禪寺ノ衛兵松平丹波守ノ
臣伊藤軍兵衛英人ノ無禮ヲ怒リ其二人ヲ斬殺シ家ニ
還テ自殺ス○是月敕使正三位大原左衛門督重徳東下
ス島津三郎久光護衛メ之ニ從ス六日江戸ニ至リ十日
城ニ入テ敕ヲ宣フ一ニ曰將軍列侯ヲ率テ京師ニ朝シ
以テ國論ヲ定ムヘシニ曰豊臣太閤ノ舊制ニ遵テ大
藩ヲ撰ミ五大老ヲ置テ國政ニ參與スヘシ三ニ曰一橋
刑部卿ヲ以テ將軍ノ輔佐トナシ越前中將ヲ大老ニ任
スヘシ此三事ノ一ヲ撰テ以テ徳川祖先ノ功業ヲ振起セ

ヨ先是幕府入觀ノ命ヲ諸侯ニ下ス然正未夕期ヲ刻セ
ス是ニ至テ遂ニ明年入朝ノ事ヲ決ス此典廢スル者ニ
百三十年○時ニ板倉伊賀守勝靜脇坂中務少輔安宅等
閣老タリ井伊氏以來ノ菲政ヲ改メ大ニ諸有司ヲ黜陟
シ誣枉ヲ蒙ル者皆伸ルヲ得テ衆情大ニ喜フ乃チ朝
命ヲ遵奉シ一橋刑部卿ヲ以テ將軍ノ輔佐ト為シ中納
言ニ任シ越前中將春嶽ヲ以テ政務總裁職ト為ス尋テ
所司代酒井若狹守ヲ罷メテ其邑ニ屏居セシメ井伊家
ニ命ノ長野主膳ヲ刑ニ處セシム井伊家既ニ誅スルヲ
以テ吞フ○七月浪士相謀リ九條家ノ臣島田左兵衛尉

宇郷玄蕃ヲ斬テ其首ヲ青竹ニ貫キ、四條磧ニ梟シ、榜ノ
曰、長野主膳ノ奸ヲ助ケ、天地容レサルノ逆賊トリ、故ニ
誅戮ヲ加フト、蓋シ長野カ京師ノ事情ヲ探偵スル、二人
ヲ以テ耳目ト為セハナリ、朝議又九條關白、久我内大臣、
岩倉少將、千種少將、久世三位、富小路中務太輔等ノ諸卿
ヲ罰シ、鷹司家ヲ以テ關白トナス、諸卿亦々關東ノ謀議
ヲ贊スルヲ以テナリ、先是幕府老中酒井雅樂頭忠績ヲ、
京師ノ守護トナス、薩州長州ノ二藩、既ニ禁闕ヲ護衛シ、
威權甚盛ナルヲ以テ、施設スル所ナク、入テ妙滿寺ニ
館スルノミ、松平伯耆守宗發ヲ所司代ト為ス、病ト稱ノ

至ラス、已ニメ土州侯山内容堂、京師ニ入ル、朝廷命ノ薩
長二藩ト同シク、輦下ヲ鎮撫セシム、於是薩長土ノ威望
諸侯ニ冠タリ、○閏八月、幕府大ニ舊制ヲ變更シ、諸侯ノ
疲弊ヲ以テ、進獻ノ物ヲ停メ、衣服ノ制ヲ定メ、登營皆馬
ヲ以テシ、更ニ會同ノ期ヲ緩フシ、夫人世子悉ク國ニ就
ク、一ヲ許ス、於是諸藩ノ夫人、姬妾、相率テ國ニ就久、緋臆
紅轎、錦綺路ヲ照ス、諸侯ノ夫人、江戸ニ生長シ、國ニ往ク
ヲ以テ、遠謫ノ情ヲ為シ、與中皆垂泣ノ江戸ヲ出、江戸
ノ殷富華靡半ハ諸侯ノ戚屬ニ賴ル、是ニ至テ二百余年、
綺靡繁華ノ状俄ニ索然タリ、○是月、京師ニ於テ、浪士復

夕本間精一郎ヲ殺メ、之ヲ四條磧ニ梟シ、警跡ノ夫文吉
ヲ絞殺メ、之ヲ縛シ、尋テ町奉行ノ屬吏渡邊金三郎、森孫
六、大河原十藏ヲ粟田口ニ梟メ、ミナ其罪状ヲ榜書ス、於
是京師ノ人、浪士ヲ畏ル、一虎ノ如シ、○十一月、先是幕
府、會津ノ藩主松平肥後守容保ヲ以テ京師ノ守護職ト
ナシ、是月故ノ井伊中將ノ罪ヲ追責メ、其十萬石ヲ削リ、
安藤對馬守ヲ罰メ、其二萬石ヲ削リ、間部下總守内藤紀
伊守、久世大和守ヲ罰メ、各一萬石ヲ削リ、堀田備中守、酒
井若狹守ヲ屏居セシメ、松平讚岐守、松平伯耆守、松平和
泉守、亦罰セラレ、其他井伊氏ニ阿黨スル者數十人皆譴

ヲ蒙ル、將軍亦夕官位一等ヲ貶メ、従前政治當ヲ失ノノ
罪ヲ朝廷ニ謝ス、朝廷優詔シ其貶官ヲ許サス、○是月、敕
使三條中納言實美副使姉小路少將公知東下ス、土州辰
山内容堂之ヲ護衛シ、廿七日、營ニ入テ敕ヲ宣フ曰、幕府
大ニ舊政ヲ變更ス、聖慮甚夕安シ、因テ明春入朝シ、諸侯
ニ令メ速カニ征攘ノ功ヲ奏スヘシト、○是月、戸田越前
守幕府ニ建白シ、其族戸田和三郎ニ命メ、山陵ヲ修メン
ト請フ、幕府之ヲ朝廷ニ奏ス、朝廷乃チ和三郎ヲ大和守
ニ任シ、山陵奉行トナス、○十二月、人アリ、搗次郎ヲ九段
坂ニ暗殺ス、其安藤閣老ノ命ヲ受テ、廢帝ノ例ヲ考索ス

ルヲ以テナリ、幕府英人ノ館ヲ御殿山ニ造ル、人アリ之
ヲ焚ク皆脱藩ノ士ノ所為ナリ、○是時ニ當テ中國鎮西
ノ諸侯、松平相模守、松平美濃守、細川良之助、松平安藝守、
有馬中務大輔、伊達遠江守等、悉ク京師ニ朝ス、中川修理
大夫江戸ニ赴シトメ、伏見驛ヲ過ク、青蓮院宮及ヒ搢紳、
諸藩ノ士ニ命メ之ヲ要メ曰、何ヲ以テ京師ニ入ラサル
ト、修理大夫即チ京ニ入ル、於是列侯京ニ朝スル者雲ノ
如シ、○文久三年正月、一橋中納言京ニ入ル、尋テ越前中
將亦朝ス、諸浪士相率テ一橋ノ旅館ニ詣リ、鎖港ノ期限ヲ
以テ逼ル、中納言曰、將軍ノ入朝ヲ待テ決セント、諸浪士

等扼腕ノ退キ、遂ニ千種家ノ臣、賀川肇ヲ斬リ、其首ヲ以
テ中納言ノ館ニ置キ、書ノ添テ其奸曲ヲ罪狀ニ、且曰、謹
テ奉呈メ、以テ出軍ノ賀儀ト為スト、又腕ヲ切テ千種家
ニ投ス、賀川ハ島田等ト共ニ事ヲ謀ル者ナリ、已ニノ長
門ノ久坂義助、肥後ノ轟武兵衛、土佐ノ武市半平太、亦關
白家ニ逼テ曰、一橋慶喜、松平春嶽、已ニ入京ノ猶鎖港ノ
期限ヲ因循シ、朝廷亦之ヲ問ハス、憤激ノ徒、或ハ尊貴ヲ
顧ミス、又ニ血ノ軍神ヲ祭ラント欲ス、關白家大ニ驚キ、
即時ニ議奏官ヲ携テ入朝シ、謀議ムル所アリ、乃チ將軍
東歸ノ日ヲ以テ、征攘ノ期ト為ス、○二月十三日、將軍江

戸ヲ發シ、三月京ニ入ル、即日關ニ詣リ、退テ二條城ニ館
ス、先是列侯京師ニ滞在スル者、八十餘藩、將軍ノ至ルニ
及テ儀衛甚々盛シニ、街衢及ヒ郭外ノ寺院ニ至ルマテ、
皆武人ナラサルハ無ク、京師ノ熱鬧、前古ノ無キ所、十
九日、英人書ヲ以テ幕府ニ逼ルニ、生麥村ノ事ヲ以テス、
初ノ島津泉州ノ江戸ヨリ還ル生麥村ヲ過ル氏、英人其
前驅ヲ犯ス、從士無禮ヲ怒リ、直チニ之ヲ斬テ去ル、是ニ
至テ逼テ曰、願クハ島津泉州ヲ獲シ、然ラサレハ償銀六
十萬元ヲ與ヘヨ、償ヲ得スニハ軍艦ヲ以テ從事セシト、
閣老等書ヲ馳セテ、京師ニ報ス、於是水戸中納言江戶

ニ下シ、英人相逼ルノ機ニ乘メ、征攘ノ事ヲ舉シ、越前
中將、亦諸浪士ノ為ニ逼ラレ、中將其事ノ俄カニ行ヒ難
キヲ知り、書ヲ上テ總裁職ヲ辭シ、直ニ國ニ歸ル、○四月、
將軍諸侯ヲ率テ入朝シ、關白以下ノ公卿ト議ヲ決シ、五
月十日ヲ以テ征攘ノ期トナス、乃チ之ヲ列藩ニ布告シ、
沿海ノ諸侯ヲメ、各々國ニ就カシム、天皇文武ノ諸官ヲ
率テ、男山ニ幸シ、相前ニ於テ節刀ヲ將軍ニ授ント欲ス、
將軍病アリ、供奉ヲ辭ス、因テ一橋中納言ニ代ラシム、中
納言亦タ俄ニ疾起ルト稱シ、祠ヲ下シ、諸慷慨ノ士、之ヲ
聞テ怒テ曰、幕府終ニ頼ム可ラスト、遂ニ逼テ天皇ノ親

征ヲ促カス、朝廷因テ一橋中納言ヲ關東ニ下シ、水戸家ヲ助ケテ鎖港ノ事ヲ謀ラシム、一橋即チ東ニ下リ水戸中納言ト議ヲ定メ、小笠原圖昏頭ニ命シ、各國ノ公使ニ告テ曰、我カ邦獨立スルヲ又シキヲ以テ、邦人ミナ外交ヲ喜ハス、故ニ京師ヨリ幕府ニ命メ、港ヲ鎖シ貿易ヲ止レトテ、圖ル、請フ之ヲ領會セヨ、公使等答テ曰、此レ吾輩ノ關ル所ニ非ス、貴國當サニ使者ヲ本國ニ遣テ之ヲ議スヘシ、然レ既ニ條約ヲ結テ復タ之ヲ破ル、各國マサニ背盟ノ罪又、貴國ニ問ハントス、貴國何ソ宇内ノ形勢ヲ知ラサルノ甚シキ、英國ノ軍艦、亦品川海ニ來リ、前事ヲ以

テ荐リニ逼ル、幕府變ヲ慮テ、事ヲ市民ニ宣布ス、市民爭テ逃避ノ計ヲナシ、舟車搬運、府下大ニ騷久、先是薩州侯書ヲ幕府ニ呈メ、曰、聞ク英人我族三郎ヲ求ムト、三郎曰、英人我カ首級ヲ求ム、我レ當サニ之ヲ授クヘシ、然レ徒ラニ授ルヲ能ハス之ヲ矢砲ノ間ニ授ケン、願クハ之カ指揮ヲ賜ヘト、時ニ幕府内外ノ事情切迫スルヲ以テ、大ニ謀議ニ困シム、是ニ至テ策ヲ決シ、終ニ贖金六十萬元ヲ與フ、英艦即チ横濱ニ退ク、府下始テ安然、○是時幕府諸浪士ヲ徵シ、俸ヲ給メ、新徵組ト稱ス、衆五百人、皆不逞ノ徒ナリ、初メ出羽ノ人、清川八郎、江戸ニ在テ尊攘ヲ唱

へ、安積五郎等其同志ニメ有志ヲ鼓動ス、已ニメ八郎人
ヲ殺メ逃亡ス、新徴組ノ舉ヲ聞キ、會津藩ニ頼テ、舊罪ヲ
解カシメ、再ヒ江戸ニ來テ新徴組ノ魁トナル、是ニ至テ
村上俊五郎、石坂周造、藤本昇等、金ヲ豪商ニ募リ、横濱ヲ
襲撃シ、レテ謀テ事露ハル、幕府乃チ其首謀ヲ執ヘテ
之ヲ拘ス、已ニメ八郎麻布ニ於テ、會藩ノ士、速水藤四郎、
佐々木只次郎カ為ニ殺サル、○五月、長州侯朝命ヲ遵奉
シ、掃攘ノ先鞭ヲ著レト欲シ大ニ下關ノ砲臺ヲ修ム、下
關ハ外船ノ常ニ往來スル所ナリ、是月米佛蘭ノ商船ヲ
砲撃シ、洋人死傷アリ、既ニメ米佛ノ兵艦來リ撃ツト三

回遂ニ我カ數所ノ砲臺、及ヒ兵艦ヲ毀テ去ル、幕府後ニ
牧野左近、村上求馬、中根一之丞、鈴木八十五郎等ヲ遣テ、
九州ヲ巡察ス、中根鈴木ノ二士、長州ニ入テ、檀マ、ニ兵
端ヲ開クテ詰問ス、長藩ノ士、答テ曰、朝命幕旨ヲ奉ス
ルナリ、何ソ敢テ擅ニセンヤト、遂ニ其使者ヲ拘留ス、或
ハ云、浪士之ヲ暗殺スト、是ヨリ幕府大ニ長藩ヲ惡ム、○
是月小笠原圖書頭歩兵數百人ヲ率テ海路大坂ニ至ル、
朝廷其京ニ入ルテ許サズ、鎖港ノ事當ノ失ヒ、且贖金
ヲ英國ニ與ルノ罪ヲ數メテ大坂ノ邸ニ屏居セシム、○
六月、江戸ノ西城災ス、明年又之ヲ築ク、九月將軍京ヲ發シ

大坂ニ至リ、蒸氣船ニ乘ノ東ニ歸ル、○先是、姉小路少将、
黄昏退朝ス人アリ之ヲ翔平門前ニ要殺ス、吏其刀ヲ檢
メ薩ノ浪士、桐賀某ヲ捕フ、某自裁メ死ス、於是薩藩ノ丸
門宿衛ヲ罷ム、公卿譴ヲ蒙ル者、數人、何ノ故ナルヲ知ラ
ス、○是月廿七日、英人軍艦七艘ヲ以テ、鹿兒島ニ來リ、生
麦村ノ事ヲ以テ贖金ヲ請フ、薩藩未タ答ヘス、七月朔、英
人妄リニ我カ蒸氣商船三艘、及ヒ琉球ノ貢船ヲ奪テ之
ヲ焚ク、薩州ノ兵之ヲ見テ大ニ怒ル、時ニ風雨俄ニ起ル、
薩兵機ニ乘シ、急ニ大砲ヲ以テ之ヲ連撃シ、其船將及ヒ
卒十餘人ヲ殺ス、英船狼狽メ退キ去ル、會々街市火ヲ失

シ延燒數百戸、明日英人來リ撃ツ、薩兵之ニ應メ砲臺ヨ
リ連發ノ英船ヲ毀ル、時ニ薩士二人、軍艦ニ乘メ英船ニ
入り、説諭スル所アリ、英人即チ戰ヲ止メテ退キ去ル、ニ
士附載ノ横濱ニ至リ、遂ニ金ニ萬元ヲ幕府ニ請テ之ヲ
與メ、事乃チ平ラク、初薩藩壯士五十人ヲ撰ミ、賣菓船ト
稱シ、分テ英船ニ入り、其船將ヲ刺シ、陸兵機ニ應メ、一撃
之ヲ墜ヒニテ謀ル、風浪大ニ起ルヲ以テ近クテ得
ス、其計終ニ成ラスト云、○八月十八日、詔メ俄カニ大和
行幸ノ止メ、長州藩ノ警衛ヲ罷ム、先是長藩及ヒ浪士等
屢々親征ヲ促シ、先ツ大和ニ行幸アラニテ請フ、之ヲ

沮ハ者アリ曰、是レ長州謀ル所アルナリ、十八日拂曉俄
ニ命ノ中川宮青蓮院近衛二條德大寺ノ諸卿及ヒ會津
中將稻葉侍從等ヲ召シ、急ニ在京ノ諸侯ニ命メ、九門ヲ
護衛セシム、諸藩ノ士、戎装シ、槍銃ヲ執テ馳セ至ル、輦下
警擾ノ曰、戰將サニ合セントス、負擔メ卑ヒ走ル、毛利讚
岐守、吉川監物、益田右衛門介等、禁中變アリト聞テ、兵ヲ
引テ馳セ至ル、門ノ閉テ入ルヲ許サス、讚州以下愕然
タリ、諸藩警衛ノ士、馳セ至ル亦入ルヲ得ス、諸士大ニ
怒テ曰、禁中警有テ入ルヲ許サス、親兵ノ名何クニカ在
ル、三條家ノ邸ニ集ル者三十人、議論沸騰ス、中川宮禁中

ニ在テ、敕ヲ諸公卿ニ傳ヘテ曰、親征ハ英斷ニ出ツト雖
氏、大和行幸ハ宸衷ニ依ルニ非ス、三條中納言等、妄リニ
長人浪士ノ暴議ニ附和シ、強テ行幸ヲ逼リ請ヒ、大ニ震
怒ニ觸ルト、因テ三條中納言、東久世少將、壬生修理大夫、
四辻侍從、綿小路右馬頭、澤主水正、七卿ノ朝參ヲ停メ、長
州藩堺町門ノ警衛ヲ罷メ、島津家ヲ召メ代ラシム、更ニ
大和行幸ヲ止ハルノ令ヲ出ス、乃チ柳原中納言ヲ以テ
敕ヲ長藩ニ下ス、藩士等大ニ不平ナリ、吉川監物終ニ敕
ヲ奉シ、兵ヲ收テ國ニ還ル、七卿相議シ、亦隨テ長州ニ走
ル、朝廷乃チ其官爵ヲ削リ、又公卿ノ長藩ニ親シキ者十

八人ヲ罰シ、毛利家ノ入京ヲ禁シ、因テ詔ノ曰、近日ノ事、命令ヲ矯ル者アリ、大ニ人心ヲ惑ハス、十八日以後、令スル所、皆宸衷ニ出ツ、四方之ニ體セヨ。○先是、藤本鉄石、松本鎌三郎、安積五郎、伴林六郎、吉村寅太郎等、前侍從中山公子忠光ヲ奉メ、兵ヲ大和ニ舉ク、侍從ハ嚮キニ幕議ノ因循ヲ憤リテ、京師ヲ脱スル者ナリ、兵凡ク千餘人、天忠組ト稱シ、河内ノ狭山、丹南等ニ入テ、軍器糧食ヲ借リ、又大和五條ニ至テ、縣令鈴木源内ニ説ク、源内命ニ從ハス、因テ其縣廳ヲ燒キ、源内及ヒ小吏五人ヲ殺シ、其器械ヲ奪ヒ、行幸ノ事ヲ人民ニ布告シ、田租ヲ除キ、民心ヲ收

ム、是ニ至テ朝議俄カニ變シ、行幸ノ止ムヲ聞テ、大ニ驚テ曰、幕兵必ス来リ撃シ、先タツテ事ヲ舉ルニ如カス、即チ兵五百ヲ分ツテ高取ノ城ヲ攻ム、城主植村駿河守、元ヨリ守備ヲ修ム、其兵大砲ヲ以テ撃テ之ヲ卻ケ、五十餘人ヲ捕ス、天忠組退テ天川過ノ險ニ據リ、兵ヲ分ツテ之ヲ守ル、九月、紀州彦根藤堂郡山ノ兵、數千人、幕命ヲ受テ来リ攻ム、安積五郎等、奇計ヲ施メ、夜ル之ヲ襲ヒ、或誘テ營ヲ焚キ、屢々之ヲ破ル、諸藩ノ兵進ムヲ能ハス、已ニノ天忠組、彈藥糧食稍ク盡キ、逃ル、者多シ、十三日、藤堂ノ兵、其背ヲ襲テ、要害ヲ奪フ、兵皆潰散ス、諸藩ノ兵分

ソテ之ヲ撃ツ、藤本、松本、吉村等皆戦死シ、乾十郎、荒巻半三郎、伴林六郎、安積五郎等五十餘人擒ニ就キ、中山公子、大坂ヨリ長州ニ奔ル。○十月、平野次郎國臣等、澤主水正ヲ奉メ、兵ヲ生野ノ銀山ニ擧ク、初メ次郎島津泉州ニ逼リ、征攘ノ三大策ヲ朝ニ上リ、其事ヲ以テ本藩ニ拘セラ、ル、朝廷其赤心ヲ知り、詔ノ其幽閉ヲ解キ、學習院ノ長ト為ス、大和ノ事起ルニ及テ、次郎ヲ遣テ之ヲ鎮靜セシム、次郎乃チ行幸ノ事ヲ陳メ、其暴ヲ制ス、十八日、朝議ノ變スルヲ聞キ、馳セテ京師ニ歸リ、七卿及ヒ毛利家ヲ、寛典ニ處ヒント請フ、省セラレス、遂ニ長州ニ奔ル、是ニ至テ澤主

水正ヲ奉シ、兵ヲ率テ但馬生野ノ銀山ニ至リ、知縣川上猪太郎ノ、麤ヲ襲ヒ、金穀ヲ奪テ、軍資トナシ、京ニ入テ、訢ル所アラントス、幕府姫路龍野出石等ノ九藩ニ命メ、之ヲ撃タシム、次郎等妙見山ニ據リ、拒戦スルヲ累日、卒ニ支ルヲ能ハス、南八郎、久留米新三郎、戸原卯橘以下十餘人戦死シ、次郎及ヒ三牧、藤藏等擒セラル、後皆刑ニ死ス、澤卿又長州ニ奔ル、初メ次郎ノ有志ヲ鼓勸スル、京師ノ僧月照其同志タリ、月照薩海ニ没スルニ及テ、次郎長歌ヲ咏メ、之ヲ哭ス、悽惋悲壯、讀ム者無泣ス、藤森弘庵、西遊ノ歸リ、月照ヲ稱メ、上國第一ノ人物トナス。○是月、島津

泉州京ニ入り、將軍及ヒ一橋中納言、越前中將等ノ再上
ヲ奏請ス、公武ノ一和ヲ圖ラント欲スルナリ、朝廷救ヲ
關東ニ下ス、○十一月、江戸ノ本城災ス、幕府費用多キヲ
以テ再築ヲ停ム、池田筑後守等ヲ外國ニ遣テ鎖港ノ事
ヲ謀ラシム、於是朝廷令ヲ諸藩ニ下テ曰、鎖港ノ事、幕府
ノ指揮ヲ待ツヘシ、輕舉暴動スルヲ勿レ、○是月廿五日、
一橋中納言京ニ入ル、十二月廿七日、將軍亦軍艦ニ乘メ
江戸ヲ發ス、○元治元年、正月十五日、將軍京ニ入り、二條
城ニ居ル、天使就テ右大臣ニ拜ス、又越前中將ヲ大藏大
輔ニ任シ、島津三郎ヲ從四位ニ叙シ、少將兼大隅守ニ任

ス、尋テ會津中將ヲ參議ニ任ス、中將之ヲ辭ス、○廿一日
將軍入朝ス、一橋以下ノ列侯四十八藩皆從ス、關白以下
ノ公卿列坐シ、中川宮教ヲ宣ス、公武一和、海内一治、確乎
不拔ノ國論ヲ定テ、以テ膺懲ノ典ヲ舉ケヨ、無謀ノ舉ヲ
為スヲ勿レ、將軍亦教答ス、○二月、和州一舉ノ魁、安積五
郎伴林六郎等十九人ヲ刑ス、○四月、將軍新法ヲ建言ス、
曰、毎年米二十苞ヲ獻メ、神廟ノ供御ニ充ツ、將軍ノ禪代
及ヒ諸侯ノ封ヲ繼キ官ニ任スル者、入朝メ恩ヲ謝ス、西
諸侯ノ江戸ニ至ル者、先ツ京師ニ朝ス、諸藩ヨリ土物ヲ
貢獻ス、凡ノ十八條、キナ朝廷ヲ尊崇スル也、○五月、朝廷

教ヲ下メ天下内外ノ政務ヲ幕府ニ委任シ、七卿及ヒ長藩ノ處置ヲ命メ曰、宜ク至當ノ公議ヲ以テ論決スヘシ、先是因州備前津山等ノ諸藩、上書メ七卿及毛利家ヲ宥サシメテ請フ報セラレヌ、已ニメ鳥津泉州西ニ歸リ、將軍亦江戸ニ歸ル、○此月水戸ノ臣、田丸綿之右衛門、山國喜八郎、藤田小四郎等兵ヲ舉テ下野太平山ニ據ル、初メ中納言ノ罪ヲ幕府ニ得ルヤ、其臣結城寅壽ノ諸ニ因ル、寅壽權變ヲ以テ藤田虎之助、戸田銀次郎等ト、齊昭ニ親任セラレ、然ル藤田等カ新進政ヲ執リ制度ヲ改ルヲ憚ヒス、中納言及ヒ藤田等カ屏居スルニ及テ再ヒ政ヲ執

リ、其黨ヲ援引ノ、中納言ノ新政ヲ廢止ス、於是一藩黨ヲ分チ、藤田ノ徒ヲ正義黨ト稱シ、結城ノ徒ヲ姦黨ト稱ス、後ニ中納言再ヒ幕議ニ參スルニ及テ、結城ノ姦計益々露ハレ、遂ニ結城ヲ戮ノ、藤田等ヲ舉ク、是ヨリ兩黨互ニ相排擠ス、是ニ至テ結城ノ黨、市川三左衛門等、又志ヲ得テ正黨ヲ排ス、田丸藤田等憤慨ニ堪ヘス、中納言ノ遺志ヲ繼テ、尊攘ヲ唱ヘ、兵三百ヲ率テ、宇都宮ヨリ、太平山ニ抵リ、軍資ヲ枋木ノ豪商ニ募ル、幕府傍近ノ諸侯ニ命メ之ヲ征セシム、六月田丸等遂ニ筑波山ニ據ル、市川等諸藩ノ兵ニ從テ之ヲ攻ム、筑山ノ兵險ニ據リ、諸兵進ム

能ハス○七月、先是長藩ノ士、屢々書ヲ朝廷ニ上リ、七卿ノ復職及ヒ宰相父子ノ入朝ヲ宥サンコトヲ請フ、省セラレス、諸士及ヒ浪士等、憤懣ニ堪ヘス、議ヲ決メ、曰、君側ヲ除クノ外、他策ナシト、是月其老福原越后、兵四百ヲ率テ伏見ニ米リ、復夕書ヲ上ル、尋テ國司信濃、益田右衛門介等、亦兵ヲ率テ至リ、國司ハ嗟峨、天龍寺ニ叱シ、益田ハ山崎天王山ニ陣ス、中川宮及ヒ一橋中納言、會津少將等之ヲ聞キ、諸藩ニ命ノ、九門及ヒ諸所ヲ警衛ス、時ニ縉紳及ヒ列藩、書ヲ上テ其罪ヲ釋サンコトヲ請ヒ、朝議一ナラス、然レ兵ヲ率テ輦轂ノ下ニ入ルヲ以テ、十八日、遂ニ征討

ノ命ヲ下ス、長人事ノ逼ルヲ聞テ、書ヲ諸藩ニ贈テ曰、我徒君側ヲ清ノセントス、少時輦下ヲ驚カサシ、請フ之ヲ恕ヒヨ、十九日、昧爽兵ヲ三隊ニ分テ、國司ハ兵五百人ヲ以テ、中立賣門ニ向ヒ、來島又兵衛、兵四百ヲ以テ、蛤門ニ向ヒ、久坂義助、真木和泉等兵五百ヲ率テ、鷹司ノ邸ニ據ル、國司ノ兵、先ツ一橋ノ先鋒ト戦ヒ、撃テ之ヲ破リ、進テ蛤門ニ至ル、薩ノ隊長仁禮源之丞、松形清左衛門等、二百人ヲ以テ馳セ至リ、其後ヲ撃ツ、一橋ノ兵返リ戦ヒ夾ミ、撃テ之ヲ破ル、來島ノ兵、已ニ蛤門ヲ破リ、進テ築地ニ入り、會津ノ兵ト鬪ス、薩州ノ兵、横ニ之ヲ衝ク、長軍退キ走

ル、來島又軍ヲ督ノ奮闘ス、薩會桑ノ兵合シ撃テ、彈丸兩ノ如ク、來島丸ニ中テ斃ル、長軍遂ニ潰走ス、久坂ノ兵亦タ越前桑名彦根ト戦テ之ヲ破リ、進テ疑花洞ニ入ラントス、薩會ノ兵馳セ至テ、三藩ヲ援ケ、短兵砲烟ノ間ニ交ハル、兩軍酣戦、郊ヨリ已ニ至リ死傷頗ル多シ、官軍命ノ火ヲ鷹司ノ邸ニ放テ、炎焰大ニ起ル、長軍終ニ敗レ、隊長久坂及ヒ入江九市、寺嶋忠三郎等數十人皆死ス、福原夜半伏見ヲ發シ、彦根ノ兵ト遇テ、撃テ之ヲ破リ、勢ニ衆ノ進ム、大垣ノ兵銃手ヲ備テ要撃シ、大ニ之ヲ破ル、福原創ヲ蒙テ退ク、故ニ會戦ヲ得ス、戦已ニ止ム、兵火益烈ク、市民

皆膽ヲ落シ、駭走ス、第宅街市皆蕩盡ス、益田等八百餘人ヲ以テ、山崎ニ據リ、後援タリ、已ニノ三隊皆敗レ、真木和泉、松山深藏等、京師ヨリ脱シ歸リ、益田等ヲ諭シ逃レシム、廿一日、會桑ノ兵來リ攻ム、和泉以下五十人、力戦シ營ヲ燒テ自殺ス、於是、平野次郎、安積五郎等三十三人ヲ刑ス、○八月、幕府議ヲ決シ、長藩闕ヲ犯スノ罪ヲ倡ヘ、征討ノ令ヲ下シ、尾張大納言ノ總督トナシ、二十一藩ニ命メ之ヲ討ツ、○是月五日、英米蘭三國ノ兵艦十七艘、長州赤馬關ニ來テ砲臺ヲ撃ツ、戍兵之ニ應メ砲戦スルヲ兩日大ニ砲臺ヲ破ラル、已ニメ和ヲ議ス、各國公使幕府ニ逼

テ曰贖金三萬元ヲ得レ、之ヲ長州ニ取レカ、幕府之ヲ與
ルカ、幕府答テ曰、之ヲ長州ニ取テ與ヘシ、○是時ニ當テ、
關東ノ浪士、筑波山ニ集ル者數百人、水戸ノ上、田中源藏、
千種太郎、國分新太郎ノ徒、常総ノ間ニ横行シ、勢益々張
ル、然レ跡令一ナラス、至ル所暴掠シ、庶民大ニ苦ム、幕府
乃チ參政田沼玄蕃頭ヲ遣リ、三兵隊ヲ率テ之ヲ撃ツ、市
川等之ニ謀リ、大ニ藩内ノ正黨ヲ擯斥ス、正黨禍ヲ畏レ、
三百餘人、脱シテ小金ニ至リ、礫川邸ニ訴ヘレトス、幕府
因テ中納言ニ命シ、其支藩松平大炊頭、及ヒ武田伊賀ヲ
遣テ之ヲ鎮撫セシム、武田遂ニ小金ノ徒ヲ率テ水戸ニ

至ル、市川ノ黨之ヲ下街ニ拒ミ、銃手ヲ以テ要撃シ、水戸
ニ入ルヲ許サス、武田等大炊頭ヲ奉リ、磯濱ニ奔ル、八
月十二日、磐舟山ノ姦黨ヲ撃テ之ヲ走ラセ、那珂湊ニ比
ス、市川ノ黨其罪ヲ聲シ、其妻孥ヲ捕ヘテ獄ニ下シ、遂ニ
武田等ト相攻ム、田丸山國等之ヲ聞テ、力ヲ武田ニ戮セ
シ、一ヲ議ス、浪士ノ横濱襲撃ヲ圖ル者、之ヲ聞テ皆其徒
ヲ率テ散シ去ル、田丸等乃チ其兵三百人ヲ以テ筑波ノ
出テ、小川館ニ屯シ、遂ニ武田ノ軍ニ合ス、先是市川等大
炊頭ヲ伴ハリ招キ、武田ニ黨スルノ罪ヲ擧ケ、幕命ヲ以
テ自盡セシム、武田等大ニ怒ル、時ニ田沼氏諸軍ヲ率テ

湊ニ逼ル、山國等拒戦ノ屢々幕軍ヲ破ル、已ニノ糧竭キ
幕軍市川等ヲ助ケ、大舉ノ来リ逼ル、乃チ京ニ至テ事ヲ
訴レト欲シ、十一月、五百余人ヲ以テ常北ヨリ兩野信州
ヲ經、沿道ノ軍ヲ破テ美濃ニ至ル、大垣ノ兵、道ヲ扼スト
聞キ轉ノ越前大野ニ至ル、加賀ノ兵、海津ヲ守ルニ遇フ、
時ニ一橋中納言、武田等ヲ討レ、朝廷ニ請ヒ、兵ヲ率
テ、海津ニ至ル、武田乃チ書ヲ呈ス、中納言納レス、遂ニ加
州ニ降り、書ヲ以テ具サニ情ヲ陳シ、大法ヲ犯スノ罪ヲ
謝シ、賊名ヲ雪カシ、請フ加州藩其事情ヲ憫ミ、之ヲ
幕府ニ啓ス、幕府即チ傍近ノ諸侯ニ命メ、之ヲ分チ拘ス、

後皆刑ニ死ス、武田等ノ墓、越前ニ在リ、香火ヲ薦ル者、今
ニ至テ絶ハスト云、後十四年、兩田ノ黨、終ニ市川等ノ姦
黨ヲ戮シ、其寃ヲ伸ルヲ得タリ、○十月、尾張大納言慶
勝師ヲ統テ藝州ニ至リ、毛利家ノ罪ヲ問フ、先是毛利家
ノ臣、福原益田等ノ、激論ヲ喜ハサル者多シ、激論家之ヲ
斥メ、俗論黨トナス、俗論黨、京師ノ變ヲ聞テ大ニ驚キ、是
我カ主公ヲ朝敵ニ陷ラシムト、福原以下其事ニ關ル
者ヲ幽閉シ、宰相父子ヲメ寺院ニ居ラシム、是ニ至テ遂
ニ三國老以下十三人ヲ刑シ、幕吏ヲ延テ罪ヲ謝ス、幕吏
城ニ入ルニ及テ、每家戸ヲ閉テ、炊烟絶ラズ、恭順甚ク至

ル、大納言之ヲ嘉シ、七卿ヲ肥筑諸藩ニ拘シ、状ヲ幕府ニ
聞シ、明年正月師ヲ班ヘス、初メ福原益田等ノ同志、高杉
晉作膽略アリ、藩ニ請テ勇悍ノ士庶ヲ撰用メ、軍伍ヲ編
シ、奇兵隊ト稱ス、高杉能ク衆ヲ御シ、部曲精銳、久坂義助
入江九市等、其隊長タリ、京師ノ役ニ、久坂等戰死ス、是ニ
至テ高杉脱メ筑前ニ在リ、三國老以下ノ死ヲ聞テ、大ニ
憤慨シ、慶應元年正月潜カニ赤馬關ニ來リ、檄ヲ移メ奮
兵ヲ召ス、集ル者五百人、乃チ山縣狂介等ト謀リ、兵ヲ赤
馬關ニ起ス、俗論黨大ニ驚キ、之ヲ幕府ニ訴ヘ、宰相父子
ヲ擁メ令ヲ邦内ニ下シ、兵ヲ遣テ之ヲ討ツ、每戰利ヲ失

ト、奇兵隊勝ニ來メ、進テ萩城ニ入ル、俗論黨恐レテ和ヲ
議ス、高杉等其首謀數人ヲ刑ス、於レ是一藩心ヲ一ニシ、高
杉山縣等相議メ曰、幕兵必ス再舉セン、宜ク一戰メ福原
以下ノ靈ヲ慰スヘシト、即チ守備ヲ修ム○四月、先是幕
府長州謝罪ノ事ヲ以テ、更ニ處置スル所ヲラントス、已
ニメ復々其内變ヲ聞テ、謝罪ノ實ヲ疑フ、朝廷亦長州ノ
事ヲ以テ將軍ヲ召ス、是月再ヒ長州ヲ討ツノ令ヲ下シ、
將軍自ラ之ヲ征セントス、尾張大納言、建言メ曰、臣嚮キ
ニ命ヲ奉メ、先利ノ罪ヲ問フ、彼レ國老等ヲ刑メ、謝罪ノ
實効ヲ表ス、而メ今復々之ヲ征セント欲ス、臣力解セサ

ル所也、彼果ノ罪アラハ、其罪ヲ天下ニ暴白スヘシ、天下
誰カ幕命ニ應セサル者アラシ、然ラスノ妄リニ師ヲ勤
カスキハ、人心ノ向背、幕府ノ安危、必ス此舉ニアラシ、請
フ之ヲ熟慮セヨ、勝安房モ亦無名ノ師功無キヲ以テ諫
ム、閑老等片ノ用ヒス初メ長州誤テ薩州ノ兵艦ヲ下關
ニ砲撃ス、薩人之ヲ含ム、故ニ京師ノ戰、首トメ長兵ヲ擊
斬ス、已ニ薩ノ謀臣、小松帶刀等議メ曰、方今ノ世上下
協力メ、皇國ヲ保護スヘシ、雌雄ヲ邦内ニ争フ、識ノ小ナ
ル者ナリト、因テ怨ヲ長州ニ釋カントス、西郷隆盛、元ヨ
リ國事ニ勤勞メ、其言ヲ喜フ、是ニ至テ密使ヲ長州ニ遣

テ好ミヲ修ム、長藩其高義ニ感メ、終ニ前怨ヲ解ク、而メ
幕府未タ之ヲ知ラス、○閏五月、將軍京ニ入り、即日入朝
シ、尋テ大坂城ニ移ル、○十二月、朝廷益々長藩ノ處置ヲ
促ス、幕府先ツ其老臣ヲ大坂ニ召ス、宍戸備後介乃チ藝
州ニ至ル、幕吏其國反覆ノ事情ヲ詰問ス、備後介、毛利家
父子ノ意ニ非ルヲ辯解ス、幕府猶其言ヲ疑テ、之ヲ藝
州ニ拘留シ、益々諸藩ノ兵ヲ進ム、○二年四月、薩州藩、師
ヲ長州ニ出ス、師ノ名無キヲ以テナリ、先是幕
府長州ノ處置ヲ議ス、衆議紛然トノ決セズ、是ニ至テ遂
ニ一定シ、長藩ニ命メ曰、大膳太夫父子、嚮キニ伏罪ノ實

効ヲ表スト雖氏邦内ニ暴徒アツテ之ヲ制スルヲ能ハ
ス其蹤跡疑フ可キ者多シ因テ罰スルニ三條ヲ以テス
曰封十萬石ヲ削ル曰大膳大夫父子終身ヲ禁錮ス曰三
國老ノ後ヲ絶ツ命ヲ奉スルキハ征討ノ師ヲ止ント速
カニ答書ヲ出サシム時ニ總督紀州大納言參政小笠原
壹岐守等諸軍ヲ統テ廣鳴ニアリ毛利家ノ答書ヲ待テ
三十日毛利家命ヲ聞テ上下皆怒リ益々戰志ヲ決メ答書
ヲ出リス於是幕府朝廷ニ奏メ進軍ヲ命ス三兵隊紀州
彦根高田ノ兵藝州ヨリシ鳥取松江濱田福山ノ兵石見
ヨリシ肥後柳川小倉ノ兵豊前ヨリシ海陸分テ進ム○

六月七日東軍二千許リ兵船ヲ以テ周防大鳴ヲ砲撃メ
之ヲ焚キ大崎ヨリ陸ニ上ル十日高杉晉作山縣狂介等
軍事ヲ督シ伏ヲ設ケテ上陸ノ東軍ヲ破リ松山ノ隊長
佐久間一學之ニ死シ鳴中餘地ナキヲ以テ東軍盡ク走
テ舟ニ上リ即夜松山ニ退ク○東軍ノ藝州ヨリ進ム者
玖波小方大竹ニ陣ス長州ニ四境アリ石見口山代口下
關口小瀬口藝州ノ境是ナリ長軍ノ小瀬ニアル者大島ノ戦合
スルヲ聞テ六月十四日進テ東軍ヲ撃ツ東軍迎ヘ戦フ
利アラヌノ退久長軍追テ宮内ニ至ル○長ノ隊將大村
益次郎井上聞多兵千餘人ヲ率テ石見口ヨリ進ム濱田

松江ノ兵、當麻栗雀ノ西山ニ拒戦ス、遂ニ利アラズ、營ヲ
棄テ、濱田ニ退ク、十七日長軍曉霧ニ乘リ幕府ノ列軍
ヲ増田ニ襲フ、幕軍大ニ破レ、濱田ノ隊長、山本半彌之ニ
死ス、長軍遂ニ周布川ヲ渡テ進ム、紀州松江濱田福山ノ
兵、分ツテ之ヲ城外ニ拒ム、長兵力戦シ、幕軍彙々卻ク監
軍三枝刑部之ニ死ス、明日長軍勝ニ乘リ城ニ逼ル、城兵
支コ可ラサルヲ料リ、城ヲ焚テ走ル、先是津和野城モ亦
自燒テ退ク、長軍遂ニ石見ヲ取ル、○閩老松平伯耆守、時
ニ廣島ニアリ、穴戸備後介ヲ宥メ長州ニ還ス、幕府大ニ
驚キ、之ヲ大坂ニ召テ詰問ス、伯耆守曰、此役必勝ノ算ナ

シ、故ニ内占ヲ備後介ニ授テ之ヲ還スノミト、書ヲ出シ
罪ヲ待ツ、○時ニ長ノ隊將、高杉晋作、山縣狂介、下關口ニ
在テ諸軍ヲ指揮シ、兵艦三隻ヲ以テ、豊前田浦ヨリ陸ニ
上リ、小倉ノ兵ト戦ス、小倉ノ將、島村志摩、兵千餘人ヲ以
テ迎ヘ戦ヒ、撃テ長軍ヲ破ル、長軍田浦ヲ焚テ退ク、已ニ
ノ長軍再々進ミ、大里田浦ヲ取リ、屢々小倉ノ兵ヲ破ル、
肥後ノ軍之ヲ援ケ、長軍ヲ赤坂ニ迎ヘ撃テ之ヲ破ル、赤
馬關ノ兵来リ加ハリ、長軍復々振テ、先是小笠原壹岐守
小倉ニ来テ軍事ヲ督ス、軍數々利ヲ失ヒ、且指揮ノ方、頗
ル衆情ニ違フ、肥後柳川ノ兵皆引テ歸ル、壹岐守乃チ海

路長崎ニ走リ、長軍勝ニ乘ノ小倉ニ逼ル、小倉接ナシ、
八月朔、終ニ城ヲ燒テ逃ル、○七月二日大野ノ幕軍、四十
八坂ヲ越テ、海軍ト相應シ、進テ長軍ヲ玖波ニ撃ツ、長軍
迎ヘ戦ヒ、勝敗決ヒス、己牌ヨリ酉牌ニ至ル、己ニノ紀州
ノ軍玖波ヲ取ル、然レ保ツテ能ハス、遂ニ玖波ヲ燒テ大
野ニ退ク、是時高田彦根紀州ノ別軍亦長兵ト松ヶ原宮
内ニ戦テ敗ル、七月七日、長軍風雨ニ乘ノ大野ヲ撃ツ、東
軍拒戦シ、遂ニ交綏ス、○七月、征夷大將軍源家茂薨ス、尋
テ謚ヲ昭徳ト賜フ、先是將軍胸痛ヲ患ヘ上書ノ軍職ヲ
辭ス、朝廷許サス、是ニ至テ疾ニ就ク、天使就テ之ヲ慰勞

ス、時ニ長州ノ役未タ功ヲ奏セズ、將軍憂勞殊ニ深シ、十
一日遂ニ大坂城中ニ薨ス、一橋中納言、諸侯ノ名望アル
者ヲ會メ、國事ヲ謀ラン、一橋ヲ請フ、朝廷之ヲ許ス、乃チ尾
張前大納言、松平下野守、松平容堂、松平閑叟、嶋津大隅守
長岡良之助、伊達遠江守、七侯ヲ召ス、○九月、詔ノ一橋中
納言ヲメ、徳川氏ヲ繼カシム、○廿五日、將軍薨スルヲ以テ
長州師ヲ罷メ、是時長軍廣島境ニ入テ退カス、幕府勝安房、名望ヲ
ルヲ以テ、廣島遣、安房乃チ長隊將廣澤兵助及井上聞多、接
具サニ命ヲ陳フ、兵士等聽カス、二將諭スニ朝命幕旨抗
ス可ラサルヲ以テス、長兵乃チ退ク、其豊前ニ在ル者亦

退カス、前キニ長藩ノ外國船ト戦フ、小倉藩手ヲ袖ニノ
傍觀ス、長人之ヲ怒レハナリ、薩州肥後ノ二藩、間ニ居テ
之ヲ和解シ、長州軍ヲ收ム、是時ニ當テ内憂外患並ヒ起
リ、將軍屢々入京シ幕府財鉅萬ヲ費スノミナラス、征長
ノ軍亦振ハス、徳川氏ニ百餘年ノ兵權、是ニ至テ衰フ○
十二月、朝廷詔ノ徳川中納言慶喜ヲ以テ、征夷大將軍ト
為ス、中納言固辭スル者再三、朝廷許サス、終ニ命ヲ奉ス、
○廿五日、天皇崩ス、壽三十七、皇太子位ニ即ク、是ヲ今上
皇帝ト為ス、天皇聰明英武、深ク國家ヲ憂ヘ、群才ヲ收攬
シ、衆議ヲ揆用シ、大ニ規畫スル所アラントス、大業未々

成ラスメ崩ス、天下之ヲ哀ム、御制ノ和歌ニ曰、戈トリテ
守レ武夫九重ノ御階ノ櫻、風戦クナリ、曰アチキナヤ又
アヂキナヤ葦原ノ頼ムカヒナキ武藏野ノ原、曰又白玉
ノ夜スガラ冬ノ寒キニモツレテ思フハ國民ノコト、天
下之ヲ誦スル者、感激毎泣セサルヲ無シ、

國史攬要
卷十五

國史攬要卷十五終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 國史, 攬要, 卷十五, and 終.]

